

聞を毎日少しずつくって、GHQは何だとか、ララ物  
資って何のことかという言葉から少しずつ覚えて、どう  
にか復職して定年までおりました。ただ、私が八年ほど  
留守をしまして、子供二人を抱えた女房がすっかり体を  
消耗しておりまして、それきり寝たきりの病人になりま  
した。二十年近く寝込まれましたのは、これも直接の被  
害ではないんですけども、私にとっては非常につらい  
思い出でございました。もうこれだけ遅れた以上は、新  
聞社の出世も立身もそんなことは問題外になりました。  
とにかく生きて頑張ろうということ。

記者をしておりましたので、その後シベリアの抑留者  
の帰還についての情報から、記録というものには非常に  
関心を持ちまして、二百冊近くの記録を集めました。

—— 帰られてから復職されるまでに、どういふんで  
すか。

一応席がずうっとありまして、いつでも帰ってこい  
というんですけれども、体がもうガリガリでしたし、  
ちょっと記憶喪失みたいになっておりまして、二か月ほ  
ど田舎で、こちらの金沢で静養して、そして、新聞を毎

日々々見て、それで二十三年十一月ごろから復職しまし  
て、文章が少しずつ書けるように。

—— 半年ぐらい。

そんなにもなかったです。二か月ほど休暇をもらいま  
した。法隆寺の大火があつて、それを取材に行けとい  
うので、なかなか言葉が出てこないで参ったことがありま  
す。

## 奉天第二監獄からマルシャンスクへ

石川県 戸藤 利夫

—— 食糧のことはどなたも出てきませんけれども、  
そういう点も話してください。

私は昭和十四年に満州国から金沢で鉄道警護軍の採用  
でございました。石川県から六人合格しまして、昭和十  
四年六月に北満に来た。そして、奉天の北の方にある  
ですが、北奉天の中央鉄道警護学院に入りまして、三か  
月間、軍事教練と法律の方を学んだわけです。それで、

三か月過ぎまして九月十日に卒業しまして、地元の奉天駅の勤務という辞令がありまして、それで約半年ばかりおりましたところ、北の方の六つ目の鉄嶺という駅の勤務に転勤させられました、そこで六年間ほどいたんです。その間、鉄道警護隊の編成する口軍と合同の工兵隊にも採用されまして、ショウカトン、撫順というところに勤務しました。その間、結婚の話もありましたものですから、本隊長に結婚休暇願いを出したところ、今独ソ戦争が始まっている最中だからしばらく見合わせるということで、そのままお流れになっていたところが、その翌年の七月に突然連隊長から命令がありまして、結婚休暇を、去年の分を許す、今すぐ帰ってこいというんで許可を受けまして、内地から嫁さんをもらって、再度渡満し、そのまま工兵隊に在籍しながら勤務していたんです。その間約三か月ばかり別居生活が続いておりましたけれども、撫順の方はもう日軍にまかすからもう解散するということで、満軍の方の部隊は解散しました。再び鉄嶺に帰りました。

と同時にすぐには隊の方から命令がありまして、今度は

特務講習。特務講習というのは昔の特攻です。ああいう方面をやれというんで、また学園へ入学しまして、そこで三か月講習を受けまして、写真と諜報、スパイ活動などいろんな教えを受けまして、隊に戻りました。今度は特務として、私服に着がえまして、コウホテンというコウザン線の一番最初の駅に勤務しました。そこは一番物騒な八路軍の潜入するところなんです。満鉄に潜入しまして、いろいろと地下活動をやっている。満鉄機関車工場というのがありまして、その工場内で隠密にやっていたわけです。そして、昭和二十年八月、終戦と同時に解散しまして、そのまま隊員は全部帰る者は帰れ、帰らない者は居留民団と一緒に内地へ帰ることになるから、一応それまでの生活として、満鉄の警備をしていた関係上、満鉄社員のバッチをもらいまして、証明書ももらいまして、腕章をはめて、近くの鉄道の方へ勤務せよというので、私もすぐ内定しておりました機関車工場に勤めることになりました。もちろんもうソ連軍は入りまして、ソ連軍の経営になっていると。毎日々々の給与は現金ではなくて、物品給与となつて好きなものを帰りに

持っていけというので、私は雑のうの中にコウウリヤンとかコークスなどを詰めては毎日買いながら生活していたわけです。家内はその当時ちょうど娘二人を持っておりましたから、どこに出ることも危ないというので、たばこを巻きながら、町へ出て満人と現金に交換して生活していました。もちろん、指輪、万年筆、ラジオなんかを売って、その日その日の生活。

とにかくコウホテンというところは先ほどのとおり一番物騒なところでございます、泥棒市場と言われたんです。泥棒の大きいやつは、みんなそこへ逃げ込んだら、とても見つかることはできないという物騒な町でございます。勝手に日本人が出歩いたら命はたちまちなくなるというので、家内はうちにとどまっています、男連中が腰弁当で満鉄住宅の周囲の警戒にあたっていると。毎日々々八路軍とソ連軍が略奪等に来る。略奪なんかやったら、もう日本人は抵抗してはだめだ。来たら並べ、ソ連軍の命令だ。もし見つかった場合はもううち殺すというふれも回っておりまして、とにかく手持ちぶさたで、弁当を持って、ワーツとくれば、こちらはワーツと

言い返すということで、品物は家財道具まで取られほうがいい。大八車でガタゴト持っていく。もう壺と布団があるきりです。

それも八月二十一日のときにソ連軍が来まして、日本人の男は全部前に出る、道路に出ると言われて、道路へ集まりまして、それもバンザイして、手を上げて集まったわけです。そして、全員が集まった結果、そのまま公安隊に連れられて、コウホテンの警察の広場に集められました。そして、今度は身体検査をしながら、また拳銃、日本刀を持っているものは班長を通じて提出せよということになりました。私はまだ当時日本刀は私物ということでございますので、私物はうちの畳の下に入れてあった。それを班長に言わんと、班長は責任をもって殺されるといふことになるし、迷惑かなと思いましたがけれども、その当時警察でそう言いながら調べていた八路軍の隊長が、幸か不幸か私の使っていたのを見ています、その密偵が拳銃をたすきにかけて、弾丸を帯のように体に巻きつけていました。ずうっとやさしい顔だった。もちろんやさしい、頭のいい人間だったから密偵に

使っていたんですが、ずうっと一とおり回って歩いたんですが、私は全然頭を上げずに下げつきりで、見つからないように、見つからないように、こうして下げていたんです。幸いに見つかからずに夕方までおりました。夕方になりまして、もう言うこともなし、正直に言えば、班長が後でそういうことがわかった場合には自殺するという約束で全部帰れというんで、みんな安心して帰るところでしたが、帰る道がうちへ帰らずに日本軍事工場であつた大きい工場なんです。

そこで聞きますと、今度はその明くる日、女子供が全部つかまりまして、同じ警察にやられた。そこでまた調べられて、女は別に何もそういうことはなし、おやじまかせだから、一応また晩に帰せということで、また明くる日の夕方、同じ軍事工場の中に入っていた。そうすると、突然「ああ、よかったな、よかったな」とだけと言ったんですが、そのときにはあとの人はいたんだけど、うちの家内はいなかったんです。「どうしたの、あんなところの奥さんおらんがね」ということになって聞いたら、「うちのおおらん」「うちのおおらん」と大体十

人ほど奥さんのいない家族がおりまして、相談の結果、八路軍にお願いして、自分のうちへ帰してくれと。家内がおらんから捜してやってくれと。ところが、責任は持たん、どこで撃たれても知らんぞ。それでも捜すなら行けと言うんで、私は責任を持って、私が棒に白いハンカチをつけて、ちょうど八月二日はコウリヤンがだいぶ生い茂っていました。コウリヤンを食いながら、四つんばいになって、自分の官舎の方を回りまして、「戸藤の奥さんはおらんか」とみんなで呼んでくれたんです。あとの九人もそれぞれ自分のうちへ行って捜した。「おった、おった」という声も聞きました。けれども、私の家内はどうしても出てこないで、一番隅っこの方まで捜したところが、「戸藤くんの奥さんおったぞ」と言うて、だれかが見つけてくれたんです。どこにいたかというと、一番向こうの知り合いの同僚のうちの五右衛門ぶろの中に入つて、上からふたを閉めて、子供と二人で抱きながらかぶっていたらしい。そうしたら、そのときは子供は二歳と三歳の子供でしたけれども、三歳の姉がしがみつくように私の首に泣きつきました。何がこわかったか、突

然のことで私も本当にポロポロ涙が出ました。「ああ、よかった。よかった」そして、十人とも見つかりましたんで、もとの軍事工場に戻りました。そこで三日ほど、またグルグルと八路軍が回ってきて、顔を見ながら、顔を見ながら、もと軍人、憲兵、警察という者を捜していたわけです。——すぐ見つかりまして、今度は、わら縄で後ろ手にぐるぐる縛られて警察の方へ連れていかれました。今度は、今まで使っていた満兵の武官もおりまして、それは即刻公安隊に切りかえていたものですから、これは見つかりそうだと思いつつ、うつつむいてばかり、ほとんどうつつむきで顔を上げなかった。それで、最後まで見つからずに三日目に全部容疑が晴れたから、自分のうちへ帰れということで釈放していただいたんです。帰ってみましたところ、畳と布団しかなかったのが、畳は全部まくり上げられて、布団はもちろん一つもなかった。珍しいんですが柳ごおりの中に少し私の昔の古い着物を入れてあったんですが、それもなくなっていました。どこかで見つけた経験があったもので、それから次々とそういう要領で畳をまくったんでしょ。全部まくられ

て、何一つ残っていませんでした。それだけあそこらの生活はどうにも何も布団がなし。そうなりまして、さっそく前へ出まして、枯れ草を切つて、それで布団がわり。マグサで、馬と同じで、そうして相変わらずたばこを巻きながら生活をしていた。

そして、十二月二十一日、再び機関車工場から帰りまして、うちの玄関へ入りましたところ、家内が、今公安局から呼び出しがあつて、ちょっと尋ねたいことがあるというので、満人の刑事が来たから、日本人の居留民会に来てくれと。ちょっと雑のうを玄関に置いて、居留民会はすぐうしろの方ですから、そこまで走って行って、「何ですか」と言ったら、そこに丁という満人の刑事が警察手帳を見せましたから、「そうですか。何のご用でしょうか」と言つて聞きましたところ、「あなた私服だったそうですね」「特務をやっておったけど」「じゃあ小型拳銃はあった」「ええ、小型拳銃ありました。それはもう全部返納しました。武装解除のときに一緒に出しました」「そうですか、それはよかったですけれども、そこで話していても何ですから奉天の本社の主任さんにそのこ

とを伝えてください」と言われまして。今度は同僚、先ほど釜の中に一緒に隠れていました同僚も入ってきまして、二人同じことを聞かれて、二人とも奉天の主任のところへ行つて、今のとおり言いなさいというんで、一緒に行きましようというから、私はまだ夕飯も食べていないから、ちょっとご飯を食べてきますと言ったところ、ご飯は私がごちそうしますと言つて、奉天の町の出口の派出所へ行つて、中華料理をとつてくれてごちそうになりました。それで腹がいっぱいになってから、一服たばから出ると。もう夕方の八時近くだったです。それで、派出所のドアを開けて、前へ出て馬車に乗ったんです。丁という刑事と私と二人と向かい合わせに後ろ座席に乗りまして、乗るや乗らずに同僚の片手、片手に手錠をはめられたんです。「あら」と思つたんです。逃げるあれもないんだけど、用心のためかなと思ひながら奉天の警察に行つた。

そうしたところが、すぐソ連軍の方に逮捕状が返つてきた。ソ連軍にその銃を引き渡したんです。と同時に三

百円の現金と引きかえだった。というのは、日本人の元軍人、警察憲兵の経歴があるものをつかまえたら三百円と。特に鉄道警護隊というのは、もうあちこち捜しているから、ということが初めてわかつて、「あら」と、後の祭りだったんです。そして、その書類に署名捺印したら、すぐ下の留置場へ入れられた。地下の留置場に行きましたところが、ガラガラと戸をあけたところが、仲間が十四、五人も入っているんです。十畳のところを十四、五人、もっと十六人ほどいたですかね。ほとんど片顔を見せながら、戸藤が来た。わしはコウホテンの町でそのまま来た。そうか、わしは奉天の駅でやられたとか、春日町というにぎやかな繁華街を歩いていて捕まったとか、家へ捕まえにきたとか、みんなお互いに話は同じ、よく似ているんです。それも逮捕の状況はだまされ、だまされ、奉天の主任のところに行つて話せばわかるというようなことで、とりあえず留置場に入りました。

今度留置場に入つたらもうご飯が全然与えられずに、どうなっているのか、騒いでいるばかりで、ワーワー騒いでいる。ただ、入るときにはバンドと上着を取られ

ました。それだけ取られまして、たばこなんかはありまして、お金も少しポケットに入っていたから、そのまま監視に言うて、たばこを買わせたり、まんじゅうを買わせたりして、それでいたところが、相変わらずご飯を食べさせてくれんです。それで、監視にどなって、ご飯だけでも食べさせてくれんかと言って、ところが「しばらく待て」とか言うて、二階へ上がって行って、お昼ごろになったらやっとアワ飯を、日本軍の飯ごうではなくて、つゆわんに一杯アワ飯だけ持ってきてくれたです。それをむしゃぶるようになしてみんなして食べて、どうにか空腹を逃れました。

晩になりましたら、今度はソ連軍の中佐の方から呼び出しがありました、一人々々名前を呼ばれて、二階で取り調べがあつて、何を聞かれたかといつたら、前歴、自分でやっていた今までのこと、ソ連軍をいじめたとか、アメリカの兵隊をいじめたとか、スパイをどんな経験をしたのかということばかり聞かれて、みんな「知らん、知らん」と言うて帰ってきた。私もちょうど夜中の十二時半に呼び出されまして、行ったら白系の露人が横に通

訳でおりまして、中佐が真ん中に座っている。私をその前に座らせまして、「戸藤、おまえは奉天団の特務をやっておったそうやけれども、スパイを何人検挙した。鉄道謀略にやったことに何人を捕まえて、どういう拷問をしたか」と聞くんです。「私は全然駅の勤務で、ただ乗客の乗りおりだけを改札にいて、改札口、出札口両方で警戒しただけだ。何も下っぱで知らん」とこう言った。そう通訳が言っていたかどうかわかりませんが、ううと書いていたです。何も言わずに名前とサインをしると。サインだけしまして、「よし、帰れ」と言って、帰ってきましたところが、鉄嶺にいたところ、福建省の別所さんというのがおりまして、その人は憲兵とよく似ているというんで引っぱられました。完全なうそなんですけれども、憲兵とよく似ているからと。その人は拳銃の尻でたたかれ、たたかれして、肩に真黒くなっていたんです。そして、三時ごろに帰ってきました。一人々々調べられるごとに「何を言われた、何を言われた」と聞きながら、不安な気持ちだったんです。そうやってその留置場において十四日、二週間です。次から次へと同じこ

とを調べた。もう満員になったし、臭い臭いというので、そういうときに熱が出て倒れたものもありまして、十四日目に今度奉天の城南にある第二監獄に夜中の一時半ごろに幌馬車で連れていかれた。そのときは、大型のトラックですから四十人ほど入って、警官が二人おりました。幌馬車のテントはおろされてしまって、外は全然見えなかったけれども、月明かりだったもので、下の方の地面が水でキラキラ光っておりました。

それで、奉天の第二監獄に入りましたところが、一部屋に四十人、両側に二十人ずつ座らせられたんです。座っていて、朝晩二回のおかゆだけ与えられたんです。座っているからお腹はすきませんけれども、毎日々々おかゆではとっておかしい、ふん詰まりになったようです。便所というのは、普通なら留置場の外へ出してくれるでしょうけれども、その場合は隅っこの方に大きいたるがなくて、そこで用を足していたわけです。そして、二十日ほど、監獄におりましたところが、約三百人ほど集まっちゃらしいです。そして、女の軍医がたまたま回ってきまして、「さあ皆さんもう日本に帰してやるから、頭を切って

きれいにしなさい」と。「頭を切って内地へ帰るのはおかし。日本に帰るといふのはどういふことだ」と言ったら、「さっぱりせんとやっぱり気持ち悪いだろう」。そして黒のシナ服、木綿の綿入れ服をみんなに一着ずつくれた。「これはどうするんです」「いや、これを着て内地へ帰るんだけど、今帰ったら寒いからもうしばらく北の方にリンゴをつくったから、そのリンゴの栽培が済んだら東京に帰すから」そう女の軍医が言っていて、そうかなと思いながら、おかしいな、北の方へ何のためにやって、また召集されて、罪もないものを、刑も決まって。先ほどにさかのぼりますけれども、奉天の警察で即刑十五年を受けた人がおりました。やっぱり拳銃でソ連兵を撃ったとか、満人の家に強盗に入って、お金をとって救済にあてたとか、難民の救済にあてたのはたくさんあります。それは軍人でなくても、一般市民もたくさんそういうふうにして、元気なものは北満から南下してきた避難民というの、本当にこじき以下の姿だったわけです。食うに食われず、発疹チフスもたくさんあったから、それを救済するために、いろんな日本人学校とか、工場なんか



に行つては、警備のために拳銃をもらつてきて、そういうことがあつたことは事実、見た人もいるし、捕まつたのは事実ですから。そういう人たちは手錠と足錠で監獄におつたです。

そこから一月二十八日に、これから北の方へ行くから、リングをとりに行くから、監獄を出るといふので、これもやっぱり夜中に捕虜のトラックへ乗せられて奉天行きの貨物車庫から貨物列車に乗せられました。乗るときは本当に変に思つたのは、その屋根のある貨物列車の周囲に全部鉄錠網で巻いてあるんです。といふのは、後で話を聞いたんですけれども、私は前に送られた日本の軍隊がほとんど無がい車の中から飛びおりに逃げたといふ、逃亡予防のための本當の嚴重な警戒だつたんです。といふのは歩哨はやっぱり輸送の責任上、人数表と人数とを確認しなければならぬものだから、一人でも逃がさないようにといふことで、そういう警戒をしたらしい。私がおりましたところが六十人です。二段の板の上に十五人、二階に十五人、反対側に十五人の三十人、六十人が一個の貨車です。その中に歩哨が二人、だるまストー

ブを真ん中にして、奉天からゴトゴトと夜中の四時ごろに出ました。そして、それを見ていたところが、次にとまったところが、鉄嶺です。昔六年前におりました鉄嶺の駅に一たん駐車しました。すき間からこうして見ていたら、鉄嶺の駅には人影がちらちらと見えなくて、ああ懐かしいなと思つて、ここでおろしてくればいいがなと思ひながら、そのまま行つて新京に着いた。新京へ行くと、おかし。右に回るか、左に回るかといつたところが真つすぐに行つてしまつた。リングはそんなところにはないはずだがなと。そうしたところがとうとうハルビンに朝方着きまして、ハルビンに朝方立つたけれども、本當に朝方といふのはまだぼやつとした朝方で、今度は将校がずうつと拳銃で並びながら私たちの下車を待ちながら、今度はシベリア本線に乗りかえる昔の警戒に当たつていたわけです。とても逃げるすきはないです。物すごい警戒だつたです。やむを得ず逃げる気持ちもなくシベリア鉄道の汽車に乗せられました。とにかくこれはもうだめだ。ソ連に入つてしまつたんだからとお互いに六十人が、向こうもこっちもない、上下もなし、お

互いにささやきながら、そして、シベリアの方に向かったです。

ハイラルを過ぎて、興安嶺にかかる時分にもう逃走しようという話も出まして、それで金網から手を出して、実は眠っていた歩哨の首をしめた。そうしたら、反対の方の側にいた歩哨がギャツという声で居眠りから覚めて、あっと歩哨を取り返して、「今首をしめたのはだれだ。出てこい」というので、小さいところから出されまして、ドアをあけて、外へ放り出されたんです。もう凍って、外へ放り出されたら、ずうっと手が真っ白に凍傷にかかるくらい、日本人も少し通訳はおりましたものですから、ロシア語の少し上手な、東部関係でいろんな勉強をしていたものだから、朝鮮語もロシア語も知っていたものですから、通訳を通じて凍傷になったらかわいそうだからと言ってくれて、もう逃げようという気持ちはないからと言って頼んで中へ入れてもらった。そして、お昼ごろに再びゴトゴトといよいよ興安嶺を越したときに、確かに将校が扉をあけてくれましたものですから、それを見たところがソ満国境というのは確かに鉄条

網でずうっと柵があります。これはもう満州からソ連へ入ったなと確かに思いました。

——それは何月ですか。

それは一月の下旬ですから、もう二月の入りかけです。もう二日か三日でそこへ行きましたから、そしてチタに着きました。チタで全員下車されて、何という川か知りません。すぐ駅の下に川がありまして、凍った川を渡りきいたらすぐそこに収容所がありました。それで、聞きましたところが、公盆堂を改良した収容所だと。やっぱ鉄条網が外にずうっと張ってありました。その日はベニヤで仕切った、各部屋に三十人ずつほど入れられました、そこに入ったときの食糧というのはほとんどなかったです。ニシンの生、それから黒パンの一つ大きいのを十人に一つというんで、切るものもないし、ベニヤをひきちぎって、ベニヤをナイフがわりにチヨキチヨキと十人に切って分けてあげたんです。やっぱ切り方が大小あるもんだから、お腹の減ったのは目の色を変えて、もう小さい、大きいのをと文句が出ましたものですから、あみだくじになるように、右回りか左回りかとい

うので、右から順番にやって配給したような次第です。食べ物が無いのと、体を動かさないので、そこでスチームがありますので、熱があつて窓はあけられない。ドアのところもかぎがかかつて、錠をおろして、昔のドアのような小さい小窓があつてガチャンとあけて、中へ差し入れるだけです。何もしゃべることもできません、出ることもできません。そういうことが一週間続いたときに、大分発疹チフスですか、熱が三十八度になるものがバタバタと前の列、横の人という事で出まして、約二週間いたところが、ほとんど半分になりました。私の部屋の四十人がほとんど二十人になりました、医者も来てくれなきや、ただ横になっているだけで、食べ物もいらぬというんで、私あたりも少し元気がある者は二人分のパンをもらえて、だから、お腹の方には結構という喜びもあつたんです。十日に一回入浴するということなんです、そのときに着ていた満服も腕時計も全部とられてしまった。シラミの乾燥で全部かえられて、だれの服かわからんように、今度は日本軍の作業服ととりかえられました、三週間おりました。

病人はどこか奥の方の病院へやると言うて病院へ行つたんですが、どこの病院かはわかりませんが、元氣な者だけチタの駅から西の方へ向かつてトコトコと二十日間かかりました。二十日間かかりまして、モスクワの東南方、マルシャンスクという駅に着きまして、その収容所へ入りました。そこに入りましてところが、もう先客がたくさんおりまして、ほとんど日本軍の兵隊が入り、聞きましたところが、ここは関東軍の首脳部、幹部連中が入っているところだということで、中に入りましてからお会いしたんですが、中条という閣下が当番づきで個室におられました。なるほどこれは関東軍のおえら方が多いですなと思つて、それで十四日間の給与を与えられました、その間、身体検査で一、二、三の級に分かれました。私は幸いお尻だけは大きいもんだから、肉は下がつていたというか、一級の方で重労働の方に回されました。さっき半田さんも言われたとおり、三級は相おりました。三級の人は屋内作業で、ただ屋内の清掃をしたり、わらを編んだり、ぞうりをつくったり、掃除ということだけです。私は一級だったものですから、

さっそく最初はストープでたくまき運搬をやらされました、一人が抱えられるだけ抱えて、担げるだけ担げと。大きい根っこは二、三人で下で引っ張れということ、雪の上をタカタカと引っ張ったという作業をしばらくやりまして、体をならしてから、今度は草刈りといって、ずうっとしずくような草を二束ほど刈ってくるように大分山へやられまして、歩哨は一人だったんですけれども、五十人編成で行きまして、そのかわりたくさん木の根っこに、切株のところに黄色いキノコがこっぼりあったものですから、それを無理矢理とって、飯ごうでお昼に炊いて食べました。途端にもう下痢。ほとんどビチビチやっただです。毒ではなかったんですけども、消化不良で、そういうふうによられまして、それも腹がいっぱいになるのがとにかく楽しみで、草刈りに行って、ノルマは完全に一〇〇%やりました。ノルマがやかましいものですから、一〇〇%で私ら五十人はやりました。それで、ほんのかけらのパンを配給の上になちよこんとようじで刺してあったんです。それでハラシヨラボトタの方に入りましたんですが、その間、やはり四十歳以上の人

は同じ班におりましても、夜中、明くる朝の食糧のパンをよくとってあげたものです。それはみんな四十歳以上の入です。

—— 作業はほかに何かやられましたか。

まだあります。

—— どういう作業。

それが終わりましたから、今度は草刈り、農耕でジャガイモの収穫ができました。トマトの収穫、それから健康な者は屋外へ出されました、ビール工場、たばこ工場、私らはまだ元気なものですから、そういうあれじゃなくて、泥炭掘りを女の囚人と一緒にやりました。

—— 戸藤さん、さっきの後を続けてください。

あそこではそういうふうにしてまきを運搬、ジャガイモ掘り、それから泥炭掘り、運河の構築ということをやったり、私は一回だけビール工場に行きました。その間約一年、マルシャンスク収容所におりましたけれども、県人会などもうまくできまして、十三人ぐらいの県人が集まる。懐かしかった。本当に家族のような親しみでお付き合ひしていたんですが、お互いに励まし合ひな

がら帰る日を待っていたんです。その間、私の班では大分病人が出まして、病氣ばかりではなくて、とうとうそれに勝てずに亡くなった人もいました。そのまま夜中に「死体収容、集まれ」とか、班長を通じて二人係があるんです。そういうことも二、三回ありました。

ジャガイモ収穫のときにはほとんどごまかしてはポケットの中へ入れたたり、中に入れて衛門に入ってきたときに見つかって営倉に入った。営倉に入ったときには、営倉は炊事場の向こうにありまして、一番炊事場の残飯をもらうのに都合がよかったです。例えば米でもお腹に入って、下は何も敷いてなくて土だけです。寒かったです。一回入れば帰国が一年遅れるとかいうて、そういう人間がありましたけれど、その人間だけは特に七、八回入っていたんです。私はそれを恐れて、家族が早く帰っているものですから、一日も早く帰りたいという気持ちでそういう悪いことは努めて避けていたんです。先ほどの四十以上の方のあれをみると、空腹に耐えないことはもちろんですけれども、やっぱり元気で帰る

うという気持ちは同じです。非常にかわいそうだと思いますが、みんな同僚で「あいつはまたやった。またやった」と。本当に同じ人間ばかりです。それも私たちの上司なんです。隊にいたときには、「おまえ、おまえ」と怒った人が、今度は逆にそういうみじめな姿になってしまったんですが、それもやっぱりひどい一端からそうなったと思います。

その間、私も伐採で行ったときなんかは五十人編成で、歩哨ももう半年過ぎたから気も緩んだんでしよう。ほとんど私は任されていて、抑留者任せにして、班長にこれだけのノルマをとれと言うて、自分はどこかへスーッと部落の方へと行ってしまふ。「内緒、内緒」と手を振っておったんですけれども。その間にもうこれだけの量があるし、頑張ったから、もうこれが終わったら内地へ帰してやる、日本へ帰してやるということで、もう一生懸命に人のジャガイモもかっぱらうのも平気で、元気でさえいれればいいというんで頑張ってきました。それが済んだら、すぐにまた先ほどの運河へやられたんです。これはまただまされ、だまされた。一仕事している

ごとに、だまされ、だまされです。もうあきらめムードになってしまつて、また二回目のお正月をマルシャンスクで迎えたわけです。これはいつ帰れるかわからん。

とにかく体だけ大事にしなきゃだめだということでお互いに励まし合つて、それで翌年の二十三年の五月に帰ることになりました。それが十二月にマルシャンスクを出たんですけれども、ナホトカに着いたときは十二月十二、三日だったですか。最後の船が来ていたんです。それに間に合えば乗るつもりで来たんですけれども、ちょうど港を出た後で、ポーツと煙突から煙が見えたんです。向こうへ行つてしまつた。どこか途中で何かのときに休んだ関係でちょっと時間が遅れたのか。また行つてしまつたんです。ナホトカにはいったところが、テントにはいったのがアメリカ軍のテントで、ワンサワンサとやっていたんです。もうあれには参つて、もうマルシャンスクのあれと全然雰囲気が違うんです。それで、収容所に入ったら、もう入り口に大きく「何々反対」とか、いっぱい書いてあるんです。日本はもう仕事なしと。これが本当にこういうことかと思つて、一言もしゃべらず

に入つて、そこでだいぶ毎晩々々講座があつたですね。それで、来年の雪解けまで待たねばいかんということ十二月を越したんです。

大体二週間ほどの休養がありまして、今度はナホトカの岸壁の埋め立てですか、石山のあれを崩した大きいやつを一輪車に乗せて、松板をずうつと海の方へ出したところへトロッコで、一輪車で持つて行つて、ガタツガタツと畳半分ほどの穴へ捨てるんですが、そういう作業を三交代でやっていた。たまたま十二時から八時までの夜間作業に出まして、四人一組のノルマでやっていたんですが、月明かりでぼうつと海の方をながめていたところが、後ろから、ブブブツと石を積んできたトラックが下がつてきて、私の後ろにぶつかつて、それであれは大きいから六本タイヤの二本重ねたやつとの間に足がはさまつて、そのままグググツツと海の方へバックしていった。あららと思つたら、もう倒れたまま右の足のところからずうつと上がつてきて、雪が十センチほどたまつていましたから、グググツツというのがわかりました。それで、ひざのふたがビケツツといったです。今度は腰の方を

見たらガラガラといって、腰から下はもう割れるなど自分で「痛い、痛い」と言いながら、仲間の一人が歩哨の運転手に何か叫んでくれたらとまって、とうとう腰のところでとまったんです。

体が熱くなりましてぼうっとしてきたんです。今度は歩哨が足を抜くために前進して、また往復したわけです。やっとなとれましたところが、グウッと足がふくらんできまして、打撲になって、もうズボンがはちぎれるんです。あれはちょうど日本軍の下の方のすぼんだズボンで、そのズボンをはいていたものですから、もうパンパンにはれました、そうしたところが歩哨に言うて、これはもう歩ける状態ではないし、体もだいぶおかし、失神状態になっているからというので、にわかづくりの担架をつくってもらいまして、それで収容所まで雪の中を運んでもらった。すぐ軍医が来まして、体温を測ったところが、もう三十八度を過ぎて九度までいってしまいました。熱はどんどん出るし、治療はどうかと思うと、とりあえずズボンは脱げないからはさみでジュジュと切つて、それでズボンをとつてくれて、たださわっただけ

何もせんと、タオルか何かで冷やしてくれたかと思うんですが、そのまま寝かせてくれて、明るる日、熱をはかったらば八度ある。ご飯はもちろん与えられなかったですが、三日たったら少し熱が下がって八度からちょっと下がりました。そうしたらもう軍医がきて、もうあすから作業に出ろというわけで、これはもう足は全然動かんで、だめだだめだ。立ってみたら立てる元気がないんです。元気がないんで、足が突っ張つていてとでもだめだというんで、ちょうど富山県の山下という同僚で班長をしていましたから、その班長に松の木の枝を切つてもらつて、それを杖でついてもう作業に出たんです。もう靴ははくわけにいかんから、くつひもをせずにそのままズボンと入れたままで、隊列の一番前にいた人があつて、朝やはり夜明けに出ました。そうすると、作業場からナホトカまで四キロあるんではないですか。歩哨が来て、「ピストレ、ピストレ」。そして蹴ったり、たいたりする。それで前の方に手を持って引つ張っていくんですが、とってもびっこ引きながらも肩につかがって、作業所まで行つて、作業をしたんです。作業に行きまし

たら、四人のやつがもうわしに休んでおれと言うて横に座らせてくれました。座っていると今度は寒気で足が凍りつくようで、足踏みしなきゃおられんし、手はもまなきゃならんし、そうやっているとおつが回ってきて、「おまえ、サボタージュ」かなんか言われてたたかれるし、運ぶような格好だけはして、あとの三人でノルマを上げてくれました。どうにかこうにかさういうて、もう三月、四月ごろまでの雪解けまで、氷が解けるまでその作業を続けました。だんだん、足も治療をせずに治ったようですが、まだ腰の、骨盤はもうないと思います。内地へ帰ったときはもうひびが入っていました。木の枝の葉っぱのようにありました。その当時レントゲンは全然かけてくれなかったんですが、そういう状態でびっこはずうと引いていましたけれども、重いものを持ちたりなんかはできなかつたんです。ただ作業をやっているようなまねだけして、三人に助けてもらったんです。

そして、五月になりました、病人は先に帰すという第一船がきまして、私も病人だけど、まだ年寄りもいるし、先ほどの四十歳以上の上官もいるし、その人たちに先に

帰ってもらったらどうだ。順番に帰れるのならそうしてくださいとあのとき頼んで、二回目にしていただきました、ナホトカから二十三年五月十二日か十一日の船に乗りました、舞鶴に十四日に着きました。

そして、千円いただきました、おけるとすぐまんじゅうを買って、それが楽しみでうちへ帰りました。家内も待っておりまして、再会ができました子供も元気かったです。けれども、近所の評判では引揚者といわれて、昔のこじきのちょっと上のようなみじめな人間になったように思われていたです。「引揚者、引揚者」といわれおったです。

さっそく仕事はしたいですけれども、まだ体が、今度は逆に栄養失調が急にこえ出して七十キロになったです。物すごい太りまして、調子悪いことはないんですが、体がぶくぶくとむくんできました。そして、家内は子供を里に預けながら、体は郵便局へ、保険の方の外交に行っていました。お昼は、外交ですから、外回りですから、うちへ来てはご飯をつくってくれたりやっただですが、そのうちに妊娠しましたものですから、二人分働



かなければならぬというので、私は初め小さい印刷屋にいたんですけれども、印刷屋ではわずかな給料だったし、親戚にちょうど県会議長がおりまして、さっそく警察関係もわかっているなら警察学校へ入ったらどうやとあって、名刺に一枚自分の名前だけ書いて警察学校長のところへ出してもらったんです。警察学校長はそれを見て、勉強はしておらんから、白紙でいいから名前だけ書いて、後の試験で出してくれと言われたんです。

あとで行ったら、もうそれでいいから合格やと言われて、その次から入学せねばならんからうちから布団を持ってこいと言われたんですが、その布団を持っていけば、家族の布団がなくなるんです。それじゃ困る、自分だけではどうにもならんし、そういうお金もなしでことわったんです。家族のためにことわったんです。さっそく印刷の方へいったんですが、給料も安いし、妊娠してやめたら、これはまた二人分働かなければならぬというんで、何もできないけれども、鉄鋼本部だったものから、北陸機械という計測器の工場に入りまして、雑役をやったんです。雑役をやったら、二人分の給料をもら

うように、あの当時八千円ほどもらったんです。そうすると、片一方の方はやめても大丈夫だと、なれない仕事で大八車で大きい鉄材を運んだり、鉄くずを運んだり、そうやって頑張って、家族もそのまま、家内もうちにおりまして働いてくれました。休んでもらって、それで三年半ほどおりましたところが、今度は鉄鋼が不景気になりまして、倒産近くなりまして、遅配と欠配という状態になって、今度は給料が与えられない。ポーナスは分割というふうに苦しくなりまして、退職の募集がありましたものですから、すぐ退職をしまして、あのとき退職金はわずか三百円だったんですか、もらいまして、印刷の小さい機械を買いました、自分のうちでやった。

—— 今現在そうやっている。

やりました。それが継続で。その間、ナホトカで痛めました腰を赤十字病院へ行つて診てもらったところが、骨盤にまだひびが残っている。もちろん階段は上がれないんです。びっこを引いて上がるということだったんです。それで治療してもらって、今は完全。その翌年、翌年は北陸機械の会社でもう三年目のときには、相撲大会

に出るようになって、今ではすっかり治りました。おかげさまで、現在はもう何も後遺症はありません。

## 死の回帰熱そして帰還

石川県 中川 政義

私は、昭和十九年の三月に金沢の東部五二部隊に入隊しまして、現役ですけれども、それから一週間後に満州の方へ渡ったのです。満州の方は牡丹江から東寧、東寧から羅子溝、そういうところを点々として所属していたわけです。新京の方へ分遣したこともあるわけなんです。新京の警備学校ですけれども、そこへ分遣していたときに終戦を迎えたわけです。それで、原隊復帰を命ぜられて、帰る途中豆満江の川で、凶們の付近なんですけれども、その川ぞいで武装解除されて抑留されたということでございます。

収容先は、コムソモリスクにほとんどいたんですけれども、二十二年の十月ごろにナホトカへ来ました。ナホ

トカですぐに帰るようなあんばいだったんだけど、運悪くまたウラジオストックの方へ転属を命ぜられて、約一か月間、そこからそれでまたナホトカへ戻りまして、舞鶴へ渡ったという大体のあらましでございます。作業の方は、コムソモリスクでは一貫して建築作業に従事していたわけです。建築作業といっても非常に幅が広くて、最初は穴掘りから、左官、れんがづくり、大工作業、そういった細かいところまでつくられていたんです。

私どもは体があまり調子がよくなかったものですから、終戦後抑留されてから、二十一年一月前後にかけて、いわゆる栄養失調に少しなり、また栄養失調のほかに回帰熱という、熱発黄疸なんですけれども、こういう病気にかかりまして、約二か月ほど入院の経験があるわけです。この回帰熱というのは、その収容所でも約三分の一がこれによって亡くなったということを目のあたりに見えてきたわけですけれども、一時は梟場の穴掘りを仕事にしなければならなかったということもあったわけです。収容所の倉庫には、死体を着物を着せたまま放った